

『賃銀・価格および利潤』を学ぶ

第1回 四国ブロック

『賃銀・価格および利潤』の成立と意義

皆さんお元気ですか！ 今月号から『賃銀・価格および利潤』の誌上学習会を、四国ブロック担当で、22年3月号までの15回に分けて進めていきます。司会進行は吉田英和（徳島）が担当します。第1回として、「成立の歴史的背景」を須藤行彦（香川）さん、「この本の構成と内容」について、柳本勝彦（香川）さんにお願いました。

成立の歴史的背景

本書の問題意識

マルクスは、1865年6月20日と27日の両日にわたって、インター

ナショナルの中央委員会で、経済学に関する講演を行いました。それは、オーウェン主義者で、労働組合員であったインターナショナルの会員ウェストンの見解を反論したものでした。

オーウェンは、イギリスの偉大な空想的社会主義者であり、多くの点で革命的でした。しかし、その門弟たちはいつも反動的宗派を形成し、プロレタリア階級のその後の歴史的発展に面しても、師の古い見解に固執し、階級闘争をにぶらせ、対立を調停しようとしてきました。

ウェストンは、労働者階級の生活は、賃金の引上げによって改善されるか、

賃金の値上げのための労働組合の闘いは、他の産業部門に有害な作用を及ぼさないか、という問題を討論するように提案しました。ウェストン自身は、賃金の値上げは、物価騰貴をもたらして、労働者にとっては何の役にも立たぬ、したがって労働組合は有害であると主張したのです。

マルクスは、賃金の値上げは労働者にとって得なことかどうか、という労働者の直接の経済問題から出発して、これを根本的に説明するとともに、資本主義社会全体の経済機構を分析して、資本主義の内包している根本的な矛盾の展開が、社会主義の実現という政治



権力の問題に転化されることを明らかにしています。

この講演は、マルクスの名著『資本論』第一巻の公刊に先立つことわずか2年前に行われたものであり、経済学上の根本諸問題を最も平易に解説したものととして、『資本論』への最善の入門書となっています。

### 産業革命の進展と二大階級

産業革命（1760年代イギリスに始まり、1830年代以降、欧州諸国に波及）は、かずかずの技術革新をよびおこし、マニユファクチュア（工場制手工業）から機械制工業を生み出

しました。また陸地を鉄道と運河と道路の網の目でおおい、海を大船隊でおおって、運輸制度を革命し、こうして商業を地方的規模から世界を基礎とするまでに発展させました。

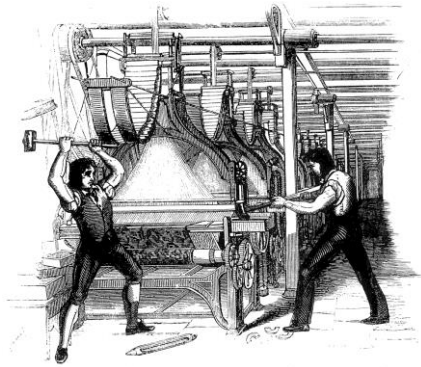
産業革命は、近代社会の二大階級であるブルジョアジーとプロレタリアートを生み出しました。『資本論』第24章・1節〜3節でマルクスは、「すなわち、一方には、その有する価値額を他人の労働力の購入によって増殖することを必要とする貨幣、生産手段、生活手段の所有者。他方には、自分の労働力の販売者であり、したがって労働の販売者である自由な労働者という、二つの非常に異なった種類の商品所有者が相対して接触せねばならない、という事情がこれである。自由な労働者というのは、奴隷、農奴等のように彼ら自身が直接に生産手段の一部であるのでもなく、自営農民等におけるように生産手段が彼らに属するのでもない

という、二重の意味においてであって、彼らは、むしろ生産手段から自由であり、離れ、解かれているのである。」その実効性として、15世紀以来の被収奪者にたいする「血の立法」として、「かくして、暴力的に土地を収奪され、放逐され、浮浪人にされた農村民は、奇怪凶暴な法律に鞭打たれ、烙印され、拷問されて、賃金労働の制度に必要な訓練を施されたのである。」そして、「興起しつつあるブルジョアジーは、労働賃金を『調節する』ために、すなわち利殖に好都合な枠の中に押えておくために、労働日を延長し労働者自身を標準的な依存度に維持するために、国家権力を必要とし、利用する。これが、いわゆる本源的蓄積の一つの本質的要素なのである。」と述べています。

### ブルジョア革命の拡大

ブルジョア革命は、ついに世界のすみずみまで拡がりました。第一インタ

## ◆みんなの学習講座



ラッドイト運動

ーナショナル創立(1864年) 当時までにおこったブルジョア革命のうち代表的なものは、イギリス清教徒革命(1649年)、アメリカ独立戦争(1776年)、フランス大革命(1789年)、フランス7月革命(1830年)、フランス2月革命・ドイツ3月革命(1848年)、アメリカ南北戦争(1861年〜65年)、等々です。

これらの革命の全般的な結果として、

資本家はすでにこの時からイギリス、西ヨーロッパ、北アメリカをほぼ握るようになり、ついには資本主義が全世界を支配するようになります。

これらのブルジョア革命とむすびついて、資本家の指導下に近代ブルジョア国家確立の歩みもすすみ、多くの少数民族の暴力的抑圧をうみだし、さらに多数のはげしい国民的戦争をもたらしました。

### ラッドイト運動から

#### チャーティスト運動へ

資本主義の急激な発展は、働く大衆のうえに、どこよりもまずイギリスの働く大衆のうえに、たちまち深刻な影響をうみだしました。資本家たちは、

かぎりない食欲さをもつて、男も女も子どもも、死の寸前まではたらかせました。労働時間は12時間から16時間におよび、賃金は飢え死にの水準であり、6歳からの子どもが工場ではたら

き、雇主たちは独裁的な支配権をふるいました。

19世紀初頭においては、イギリス各地で労働者の暴動がたびたび起きこされ、機械の破壊をめざすラッドイト運動(1811〜17年)がもえさかりました。

団結禁止法(1800年)が廃止(1824年)され、結社の権利が認められると、職人組合的な労働組合が多数生まれ、公然として抵抗が組織化されました。1836〜48年には、チャーティスト運動が拡がり、議会改革運動、選挙法改正の運動「人民憲章」へと発展し、次第に労働者の標準労働日10時間獲得運動へと進んでいきました。

チャーティスト運動は、労働者階級がはびろい全国的労働者政党をつくるうとする最初の試みであり、労働者はこの運動のなかで自分たちの大きな政治力を体験しました。

## ◆特集 みんなの学習講座

### 労働者階級としての成長

1848年革命以後、各国政府の締め付けで労働運動は弱体化し、労働者自身も運動に消極的になっていきました。しかし、イギリスの労働者は10時間労働法（1847年）を勝ち取り、協同組合制度によって労働運動の模範を示しました。新たな具体的主張として、まず第一に、世界中の労働者に「8時間労働」の実現を運動として掲げることが提起しました。

この問題について、「南北戦争の第一の成果は、…8時間法運動であった。…ジュネーブの国際労働者大会は、ロンドンの総評議会の提案に基づいて、次のように決議した、『われわれは、労働日の制限を、それなくしては、他の一切の解放への努力が挫折せざるをえない一つの予備条件であると宣言する。…われわれは、8労働時間を、労働日の法定限度として提案する。』」（『資本論』第8章・労働日）と、労

働者階級の闘いの目標を述べています。

### 第一インターナショナルの発展

第一インターナショナル（1864年9月28日）は、ロンドンのセント・マーチンズ・ホールで世界の労働者共通の利益を守るために委員会として組織しました。とりわけ、ポーランド独立運動（1863年）、アイルランド問題、アメリカの黒人問題・南北戦争（1861年〜65年）を大きな柱に、労働者の国際連帯を確認し、マルクスに国際労働者協会の「創立宣言」の起草を委任しました。

結成当時、科学的社会主義者は、ごく少数でした。イギリスでは労働組合主義が支配的であり、フランス、ベルギーでは、無政府主義の影響を受け、その他はブランキの教えに従っていました。ドイツではラサール主義の思想潮流が支配的でした。ラサールも、労働組合やストライキに反対しました。ま

さに日和見主義者との闘いでもありません。いまや大陸では、ストライキという真の流行病と、労賃の値上げを要求する一般的な叫びが蔓延しています。

### 「」の本の構成と内容

『賃銀・価格および利潤』の構成は、大きく分けると二つの部分で構成されています。第一の部分は、1章〜5章までで、マルクスは、ウエストン説を批判し、その誤りを明らかにしています。第二の部分は、6章〜14章です。ここでは、ウエストンが「価値」について全く理解できていないことから、マルクスの経済学を、要点であるが全面的に展開しています。「商品の価値とは何か」からはじめて、労働力の価値、剰余価値の生産、剰余価値の分割（利潤・利子・地代）等が分析されています。ほぼ『資本論』の概要が示されています。

## ◆みんなの学習講座

### 1章～5章の要約

1) ウェストンの主張は、賃金が騰貴すれば、商品価格の騰貴を引き起こす、故に実質賃金は変わらず、よって賃金引き上げは無意味であると。つまり、労働者の賃上げは、資本家が商品価格を引き上げるから、どのみち労働者の実質賃金は固定的であり、不変であるというのです。

そこでマルクスは、商品の価格変動は、資本家の単なる意志で決まるものか？ と問い、もしそうであるならば「市場価格の騰落、その不断の変動は解けない謎となる」のであって、資本家のこの意志を実行するには「一定の事情」が必要であるというのです。そして「賃金の騰貴は商品価格の上昇をひき起こすのではなく、利潤の低下をもたらすにすぎない」との結論を下すのです。

何故そうなるのでしょうか。労働者の賃上げは、生活必需品の需要を増や

し、生活必需品の価格を引き上げます。すると、生活必需品生産部門の資本家は、商品の市場価格の騰貴によって賃金の騰貴を償うことができます。一方、非生活必需品生産部門の資本家は、商品の需要は増加しないから、市場価格は上がらず、賃金騰貴による利潤の減少を償うことはできません。そうすると、資本は利潤の大きな生活必需品部門に移動し、供給を増やし商品の価格を下げる、その結果、起こることは総資本の平均的な利潤率の低下につながります。

2) 5章においてマルクスは、ウェストンのこれまでの主張を「最も簡単な理論的表現に還元する」と、「諸商品の価格は賃金によって決定または規制される」というドグマに解消されると述べておいて、マルクスはこのドグマを次のように痛烈に批判します。「諸商品の価格は賃金によって決定される」というのはどんな意味であるのか」賃

金は労働（労働力）の価格であり、価格とは交換価値のことであり、この命題は、「諸商品の価値は労働の価値によって決定される」ということに帰着するのです。このような循環論からは何の結論も得られません。つまり「賃金は諸商品の価格を決定する」というドグマは、最も抽象的な表現にすると、「価値は価値によって決定される」ということになり、これは、価値について全く何も解っていないことを意味します。そこでマルクスは、問題の真の展開に入るとして、6章の「商品の価値とは何か」から出発します。

### 6章～14章の要約

6章以下の内容は、資本主義社会の経済的構造を分析したもので、それを要約すると次のようになります。

1) 商品の価値はその商品に含まれる総労働量によって決定されます。資本主義社会では、労働力も商品であり、

## ◆特集 みんなの学習講座

その価値は、労働力の再生産に必要な労働の分量によって決定されます。しかし、労働者の一日の労働は、彼の労働力の日価値を超えた価値、すなわち剰余価値をつくりだします。よって、資本家は、価値どおりに売って、剰余価値を手にすることができなのです。

商品の価値から生産手段の価値部分を引いた残りは、最後に使用された労働者によって創り出された価値部分です。そこで仮に、資本家によって搾取される剰余価値の総量を、利潤という言葉で表すものとすれば、先に述べた価値部分は賃金と利潤に分配される唯一の元本です。このように見ると、賃金と利潤とは全くの対立関係にあり、だから、賃金の一般的騰貴は、一般的利潤率の低下をもたらすが、商品の平均価格、すなわちその価格には影響をしないのです。このことは、資本と労働とが根本的に対立、闘争をせざるを得ない関係を意味するものであること

を如実に物語っているのです。

② このことからマルクスはさらに議論をすすめて「資本と労働とのこの絶えざる闘争において、どの程度まで後者が成功するだろうか」という問題提起をしています。ここからは、最後の14章です。

資本主義的生産の一般的傾向は、窮乏化法則的作用によって、賃金の平均水準を常に下げます。しかし、「この制度における自体の傾向はこうだとしても、なお、労働者階級は資本の侵略に対する彼らの抗争を断念し、その時々を機会を彼らの状態の一次的改善のために利用しようとする企てを放棄」するならば「彼らはいずれも、救済のしようもない敗残者の群れに墮落するであろう」と。

マルクスは、資本との日常闘争の意義を強調するとともに、労働者階級が忘れてならないのは、彼らが闘っているのは結果とであってこの結果の原因

とではないということ、彼らは下向運動を阻止しているのであって、その方向を変えているのではないと述べています。さらにマルクスは、労働者階級は「公正な一日の賃金」という保守的標語の代わりに「賃金制度の廃止」という革命的スローガンを掲げねばならない、ということです。そして、「労働組合は、資本の侵略に対する闘いには立派に作用するが、それに専念して、同時に現行制度を変化させようとしないうならば、一般的に失敗する」と、いうのです。

これがマルクスの講義の結論です。この結論を換言すれば、「経済闘争を政治闘争に発展させ、労働者階級の解放をかちとるために、『賃金制度の廃止』と『社会主義社会を打ち立てるため』に闘わなければならない」と述べて、この講義を終えています。